

# 里の春、山の春

新美南吉

青空文庫



野原にはもう春がきていました。

桜がさき、小鳥はないておりました。

けれども、山にはまだ春はきていませんでした。

山のいただきには、雪も白くのことっていました。

山のおくには、おやこの鹿がすんでいました。

坊やの鹿は、生まれてまだ一年にならないので、春とはどんなものか知りませんでした。

「お父ちゃん、春ってどんなもの。」

「春には花がさくのさ。」

「お母ちゃん、花ってどんなもの。」

「花つてね、きれいなものよ。」

「ふうん。」

けれど、坊ぼうやの鹿しかは、花をみたこともないので、花とはどんなものだか、春とはどんなものだか、よくわかりませんでした。

ある日、坊ぼうやの鹿しかはひとりで山のなかを遊んで歩きまわりました。

すると、とおくのほうから、

「ぼ才ん。」

とやわらかな音が聞こえてきました。

「なんの音だろう。」

するとまた、

「ぼおん。」

坊ぼうやの鹿しかは、ぴんと耳をたててきいていました。やがて、その音にさそわれて、どんだん山をおりてゆきました。

山の下には野原がひろがっていました。野原には桜さくらの花がさい  
ていて、よいかおりがしていました。

いっぽんの桜さくらの木の根ねかたに、やさしいおじいさんがいました。  
仔鹿こじかをみるとおじいさんは、桜さくらをひとえだ折おつて、その小さい  
角つのにむすびつけてやりました。

「さア、かんざしをあげたから、日のくれないうちに山へおかえ  
り。」

仔鹿こじかはよろこんで山にかえりました。

坊<sup>ぼう</sup>やの鹿<sup>しか</sup>からはなしをきくと、お父<sup>ちち</sup>さん鹿<sup>しか</sup>とお母<sup>はは</sup>さん鹿<sup>しか</sup>は口をそろえて、

「ぼおんという音はお寺<sup>てら</sup>のかねだよ。」

「おまえの角<sup>つの</sup>についているのが花だよ。」

「その花がいつぱいさいいていて、きもちのよいにおい<sup>い</sup>のしていたところが、春だったのさ。」

とおしえてやりました。

それからしばらくすると、山のおくへも春がやってきて、いろんな花はさきはじめました。







# 青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 里の春、山の春

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>